私と母とテスト

西部中・１　近藤　杏堵

私の一番苦手な瞬間
それは母にテスト結果を見せるときだ
百点じゃないと必ず息を吐くように言われる
「あっ。凡ミスだね。頑張りな。」
それが九十五点でもだ
百点でも
「おっ。継続しな。」
この言葉は嫌なわけじゃない
ただ
「すごいね。」
その一言を私は求めていた
最近言われたのは
八年くらい前が最後だろう

幼少期は
立つだけ食べるだけ
しゃべるだけ絵を描くだけ
それだけで
「すごいね。」
私の今最も求めている言葉を
お腹いっぱいになるくらいまで言ってもらえた
私はうれしかった
胸いっぱいにうれしかった

でも今は違う
中学生になり一番避けたい話が出てきた
中間テストだ
脳裏によみがえる
寂しい記憶
だからあの言葉を聞かないために
寝る間も惜しんで
時間をけずって
死ぬ気で体調を崩しかけても
がむしゃらに頑張った
不安でいっぱいの心を
勉強で覆うように必死にやった

そして順位は五位
私にとっては百点中百点の出来だと心から思えた
だけど母は九十点だと私に言った
心から何か音が聞こえ
崩れた気がした
こぼれそうな涙を抱えて自室へ逃げ込み
小さく泣いた
二百三十人中の五位で九十点
期待していた私がバカだった
悔しくて悔しくて
すぐには泣き止めなかった
だから期末テストで
見返してやると心に誓った

期末テストに備え始める日がきた
中間と同様に死ぬ気で勉強に集中した
寝不足の日も頑張った
八教科あっただけに時間が足りなかった

当日
手応えは少なかった
「ああ。終わった。またあの言葉を聞くんだろうな。」
心の中で強く思った
成績個票配付の日
固まってしまうほどの順位であ然とした
百点中三十点の出来だと思った
自分よりも高い順位の人が周りにいた
悔しかったし苦しかった

家に帰り母に見せるときがきた
成績個票を渡し母が口を開いた
私は
「来るぞ。三、二、一…。」
母から出た言葉は
私の予想を裏切るものだった
「おっ。よくやったね。すごいじゃん。百点の出来だね。」
私は驚いた
下がっているのにと思ったが関係ない
「ん。ありがと。」
思春期特有のそっけない返事をし
いつも通り自室へ

私はなぜか
幼い頃にもらった温かさと似たようなものを
感じうれしくなった
うれしくてうれしくて
言葉にできなかった
久しぶりに愛情を感じとれた気がした
母親からの愛情ほどうれしいものはないと
改めて感じることができた二か月だった

６・９